第十講　『本朝桜陰比事』（近世小説）

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

むかし、都の町はづれより、賀茂川の岸づたひに、北山へ帰る老人あり。折ふし、十二月二十八日の夕暮れ、世間は①春の事ども取りいそぎ、心せはしきけふも、*御堂(みだう)下向の道芝に、紙包(かみづつみ)見えけるを拾ひあぐれば、「小判三両」と書付あり。いかなる人の、節季をしまふ(A)心当てにもやと、あと先見しに、往来もなく、はるかの松陰に、柴売と見えし人の立ち休むに追ひつき、「そなたはこれを②落とし給はぬか。」といへば、「いかにも我ら、落としたれども、その方の手に入るからは、そなたの物。」といふ。「これは近ごろ、めいわくなる申され分なり。たとへこの主のなきとて、取りては帰らじ。まして主ある金子(きんす)を、とりて帰るべきか。」と、その者に渡せば、拾ひし者に返しぬ。なげやれば、*ほほりつけ、しばらくこの(B)論やむ事なし。後には、*黒木売・牛つかひ、立ちとどまりて、「今の世の中には③ためしなき事ぞ。」と、両人の心ざしを感じける。

いよいよ互ひに道を立て、この小判をさまり所なく、とかくこの論、下にて済み難く、両人*御前(ごぜん)へ罷(まか)り出で、右の段段

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

申し上ぐれば、当番の役人衆聞き給ひて、「前代（ぜんだい）になき事、これは都の今聖人なるべし。」と、この段御取次申し上げらるる折ふし、御前には御(C)気色あしく、前後に京中の医者衆相つめられける。時に御名代の家老職をめされ、智恵だめしにこの裁きを④仰せ付けられしに、ここを大事と思案して、その拾ひし三両の小判を出させ、御前の小判三両合わせて六両を取りまぜ、三所に置きて、「まづ、落としたる者に二両渡して一両の損なり。また、拾うたる者二両とれば、これも一両の損なり。御前の金も一両御失墜なり。両方ともにまかり立て」と、申し付けられけるを、いづれも(D)発明なるさばきなりと、⑤これを感じ、この段御耳に立つるに、なかなか御同心なく、「その方どもが気のつけ所、相違なり。この二人内談にて、かく取りむすびし作りものなり。その子細は、拾ひし者、その主と論におよばず、捨てやうはさまざまありしに、ここに出でける所、第一の聞き所なり。正直者と都に顔を見知らせ、するずるゐ＊人をかたりの⑥たくみせしには違ふまじ。その二人呼びかへせ。」と、また、御前にめし出され、右の段段仰せわたされ、「ありのままに白状申さぬにおいては、拷問。」と、きびしく御詮議かかれば、⑦山家の者驚き、「あの者に頼まれ、何心もなくいひふくめ候ふ通りに、落とし手に罷りなり、あらそひ候ふ」と申し上ぐる。「しかれば、悪事は拾ひ手めがたくみなり。見分（けんぶん）、＊家に杖突く年をして、無用の心根（ね）、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

仕置きにもすべきなれども、おのれが身の上ばかり、⑧外にさはらぬ事なれば、洛外(らくぐわい)までも払ふべし。」また、たのまれし者めは、久しく住所の鞍馬にちかき麓(ふもと)里を、追ひ払ひ給ひけるとなり。

（西鶴『本朝桜陰比事』巻三の四「落とし手あり拾ひ手あり」より）

〈注〉

御堂下向…御堂参りの帰り道。
ほほりつけ…放りつけ。
黒木売…八瀬・大原から京都の町へ黒木（生木をいぶした薪）を売りに来る女たち。
御前…京都の町奉行。
人をかたりの…人をだますための。
家に杖突く年…五十歳。

問一　傍線部①「春の事ども取りいそぎ」とは、何を急いでいる様子を表しているか。次の中から最も適当なものを一つ選べ。

イ　新年の挨拶まわり　　ロ　歳末の取り立て　　ハ　正月祝いの準備
ニ　衣替えの準備　　ホ　婚礼の準備

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問二　傍線部（A）〜（D）の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選べ。

（A）心当て
イ　心みだれ　ロ　心づもり　ハ　執心
ニ　気概　ホ　気力

（B）論
イ　言い捨て　ロ　言い繕い　ハ　言い残し
ニ　言い争い　ホ　言い訳

（C）気色
イ　機嫌　ロ　感情　ハ　体調
ニ　懐具合　ホ　人付き合い

（D）発明なる
イ　予想外な　ロ　独りよがりな　ハ　小細工好きな
ニ　不当な　ホ　賢明な

問三　傍線部②「落とし給はぬか」の品詞分解として、最も適当なものを次の中から選べ。

イ　動詞＋補助動詞＋助動詞＋助詞
ロ　動詞＋補助動詞＋助動詞＋助動詞
ハ　動詞＋助動詞＋助動詞＋助詞
ニ　動詞＋助動詞＋助動詞＋助動詞
ホ　動詞＋助詞＋助動詞＋助詞
ヘ　動詞＋助詞＋助動詞＋助動詞

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問四　傍線部③「ためし」を漢字一字で記しなさい。

問五　傍線部④「仰せ付けられし」の主語として、最も適当なものを次の中から一つ選べ。

イ　御前　　ロ　医者衆　　ハ　家老職　　ニ　両人　　ホ　当番の役人衆

問六　傍線部⑤「これ」の指す内容として、最も適当なものを次の中から一つ選べ。

イ　両者の潔さ　　ロ　両者への不審　　ハ　三方一両損の発想

ニ　三方一両損の法的公平さ　　ホ　奉行所の権威

問七　傍線部⑥「たくみせしには違ふまじ」を現代語訳しなさい。

問八　傍線部⑦「山家の者」は問題文の最初に登場したとき、どのように呼ばれているか。その言葉を五字以上十字以内で抜き出して記しなさい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問九　傍線部⑧「外にさはらぬ事」とはどういうことか、最も適当なものを次の中から一つ選べ。

イ　京都の町以外では裁けないこと
ロ　京都の町から出て行かないこと
ハ　特に内密にしなくてもいいこと
ニ　奉行所以外に漏れていないこと
ホ　誰にも迷惑をかけていないこと

問十　問題文の内容と合致するものを次のイ〜ヘから二つ選べ。

イ　三両の落とし手は、拾い手がわざわざ届けてくれたにもかかわらず、執拗に所有権を放棄し、拾い手に三両を受け取るように言い張った。
ロ　三両の拾い手は、落とし手の所有権を主張したが、いくら言っても受け取らないのであきらめた。
ハ　三両の所有権をめぐって、落とし手と拾い手が小判を投げつけるなど派手に争ったために、両人とも奉行所の役人に呼びつけられた。
ニ　三両の落とし手と拾い手は三両の所有権について裁いてもらおうと、目立たぬようにして、密かに二人で奉行所へ訴え出た。
ホ　三両の落とし手と拾い手は共謀者で、三両の事件で世の人を深く信用させた上で、詐欺などをはたらこうとしていたことが別の事件から発覚した。
へ　三両の落とし手は事件に加担したものの、主犯の拾い手の老人に頼まれただけであったので、長年住み慣れた場所から所払いとなった。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第十講　『本朝桜陰比事』（近世小説）

①　「けしきもや変るらむ」とは、どのような意味か。次の中から最適なものを選べ。

ア　顔色が変わっているだろうか。
イ　大臣の気持ちが変わるだろうか。
ウ　世の中が変わってしまうだろうか。
エ　親子の仲が変わってゆくのだろうか。
オ　入内がとりやめになるだろうか。

②　『日本永代蔵』の作者は井原西鶴である。西鶴の作品ではないものを、次の中から一つ選べ。

1　好色五人女　　2　好色一代男　　3　世間胸算用　　4　曾根崎心中

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十講

〔解答〕

問一　ハ　**問二**　(A)ロ　(B)ニ　(C)ハ　(D)ホ

問三　イ　**問四**　例　**問五**　イ　**問六**　ハ

問七　たくらみをしたのには違いあるまい。　**問八**　柴売と見えし人（七字）

問九　ホ　**問十**　イ・ヘ

〔現代語訳〕

むかし、都の町外れから、賀茂川の岸伝いに、北山へ帰る老人がいる。折しも、十二月二十八日の夕暮れで、世間は正月祝いの準備を急ぎ、心慌ただしい今日も、御堂参りの帰り道の道ばたに生えている芝草に、紙包みが見えたのを拾い上げると、「小判三両」と書き付けがある。どんな人が、大晦日の支払いをすますます心づもりにした金であろうかと、前後を見たが、人の行き来もなく、遠くの松の陰に、柴売と見えた人が休むのに追いついて、「そなたはこれを落としなさらぬか。」と言うと、「確かに私は、落としたけれども、そなたの手に入るからには、そなたの物。」と言う。「これはたいそう、迷惑な申されようである。たとえこの持ち主がないといっても、取っては帰るまい。まして持ち主のいる金を、取って帰ることができようか。」と、その者に渡すと、拾った者に返した。投げてやると、放りつけ、しばらくこの言い争いは終わる事がない。のちには黒木売り・牛使いが、立ち止まって、「今の世の中には例のない事だ。」と、二人の心のありようを感心した。

いよいよお互いに道理を主張して、この小判は収まり所がなく、とかくこの言い争いは、下々で終わりにくく、二人は京都の町奉行へ出て、以上の事々を申し上げると、当番の役人たちがお聞きになって、「前代未聞の事、これは都の今聖人であろう。」と、この事をお取り次ぎ申し上げなさる折しも、奉行は体調がお悪くて、前後に京中の医者たちが詰めていらっしゃった。その時（奉行は）代理の家老職をお呼びになって、智恵試しにこの裁きを命じなさったので、（家老は）ここを大事と考えて、その拾った三両の小判を出させ、奉行の小判三両を合わせて六両を取り混ぜ、三所に置いて、「まず、落とした者に二両渡し

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

て一両の損である。また、拾った者が二両取れば、これも一両の損である。奉行の金も一両損失である。二人とも（席を）立て」と、申しつけなさったところ、誰もが賢明な裁きだとこれを感心し、この事を（奉行の）お耳に入れると、いっこうに同意なさらず、「おまえたちの心の付け所は、違っている。この二人がこっそり相談して、このように取りはからった作り事である。その理由は、拾った者が、金の持ち主と言い争いをせず、捨て方は色々あったのに、ここに出た事が、第一の聞き所である。正直者と都に顔を見知らせて、のちのち人をだますためのたくらみをしたのには違いあるまい。その二人を呼び返せ。」と、再び、御前に呼び出しなさり、以上の事々を言い渡しなさり、「ありのままに白状申さぬ時には、拷問（する）。」と、厳しく取り調べなさると、山家の者は驚いて、「あの者に頼まれて、何の考えもなく言い含めます通りに、落とし手になり、言い争いしました」と申し上げる。「それでは、悪事は拾い手のたくらみである。一見すれば、五十歳にもなって、無益な考えは、死罪もするべきであるが、自分の身の上だけで、（まだ）誰にも迷惑をかけていない事なので、都の外までも所払いにしよう。」また、頼まれた者は、末永く住んでいる鞍馬に近い麓の町を、追い払いなさったということである。

〔重要単語〕

○こころあて【心当て】…①心の中であれこれとおしはかること。**あて推量**。②**心づもり**。

○けしき【気色】…①自然のようす。②趣。③**態度**。**顔つき**。④**意向**。⑤**機嫌**。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題解答　第十講　『本朝桜陰比事』（近世小説）

〔解説〕

①　「けしき」の意味で、ア「顔つき」とイ「気持ち」に絞る。あとは「らむ」の識別。**ｕ段**に付いているので、**現在推量**の「らむ」。よって、「～いるだろうか」という訳出のアが正解。

②　４『曾根崎心中』（浄瑠璃）は**近松門左衛門**の作。１～３は浮世草子。

〔解答〕

①　ア　②　４

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。